

令和元年度長野市観光振興計画の進捗及び指標達成状況について

1. 計画の目的及び評価の視点

(1) 長野市観光振興計画の目的

観光を通じて地域の魅力やそこにしかない資源を味わっていただき、長野市に何度も訪れてもらうリピーター＝「ながのファン」を創出・増加することが重要です。そこで本計画では、「ながのファン」創出・増加のための取組みを行い、その中で以下の2点についての実現を目指します。

①本市経済の活性化の実現

観光は経済活動です。訪れてもらうだけではなく、楽しんでもらいながら本市経済の活性化につなげる事業を実施します。

②地域コミュニティの活性化

観光客が訪れ、地域の人々と交流することは、ときには地域に希望や生きがいを生み出します。これまで観光客が訪れなかった地域にもスポットを当て、観光客と地域の交流を生み出す事業を実施します。

(2) 計画評価の意義と必要性

本計画では地域経済や地域コミュニティの活性化を目的に、観光振興のための様々な事業を実施します。そのためには、行政や観光関連組織だけでなく、民間事業者や地域住民も主体として活躍してもらう場面が多く出てくると考えられます。その際、多様な主体が共通認識を持って事業を行うことができるよう、計画を通じて目指す姿を指標化し、毎年度その達成状況を明確にしていきます。

前計画においては、事業を進める中で地域資源の磨き上げがある程度進んだ一方で、市内を周遊する動きがあまり見られなかったなどの課題がありました。

そこで、本計画では、PDCAサイクルを毎年度回すことで、いずれの取組みも改善・改良して次につなげるようにしていきます。

2. 評価の方法

本計画の体系は、「政策－施策－事業」の3階層となっています。政策にはKPI（重要目標達成指標）を設定しており、数値によって年度の達成状況を把握していきます。施策、事業は、事業の年度ごとの実施状況を評価し、それらを総括した評価を施策評価とします。事業評価では、年度別に取組んだ事業について、取組みの成果・課題を整理し、次年度以降継続する必要があるかどうかについても評価します。

また、各事業が最終的に目指す指標として、総合目標値を設定します。総合評価は、「ながのファン」の創出・増加に伴い、地域での消費活動の活発化を示す指標として「地域への経済波及額」を設定しています。中間年においては計画を総合的に評価・検証し、事業継続の判断や、実施方法の改善等を行います。

3. 事業評価

政策別に取組んだ事業について評価を行います。評価は施策別を実施し、事業による成果や外部要因による事業への影響等について分析し、次年度以降の継続についても評価します。

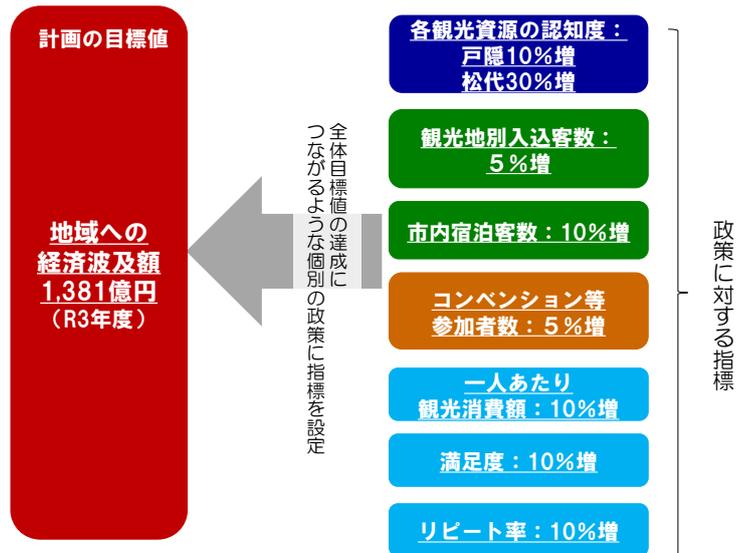
（別紙「令和元年度長野市観光振興計画に基づく事業実績及び評価」参照）

4. 政策別KPIの進捗状況

政策1～4は、事業の取組みを踏まえて目指すべき指標（KPI）を設定しています。それぞれの政策で設定したKPIの進捗状況を把握し、施策・事業がどのような効果をもたらしているのか、あるいは改善が必要なのかを分析し、次年度以降の事業検討に活用します。

本資料では、以降のページにおいて、令和元年度時点の各政策のKPIの進捗状況および計画全体の目標値である「経済波及効果」の進捗状況を整理します。

■目標管理のイメージ



(1) 市内観光資源の認知度

(単位：%)

		基準値 (H27年度)	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度	R3年度
善光寺	目標値	94.5	-	-	横ばい	-	横ばい
	実績値	-	-	-	82.6	-	-
戸隠	目標値	79.3	-	-	85.0	-	90.0
	実績値	-	-	-	61.2	-	-
松代	目標値	50.6	-	-	70.0	-	80.0
	実績値	-	-	-	34.8	-	-

評価

- 令和元年度の市内観光資源の認知度をみると、いずれの観光地点においても平成27年度調査の基準値から認知度が低下しており、計画目標値から乖離している状況である。
- 地点別に令和元年度の認知度をみると、善光寺で82.6%、戸隠で61.2%、松代で34.8%であった。平成27年度調査と比較すると、善光寺で11.9ポイント、戸隠で18.1ポイント、松代で15.8ポイント低下している。ただし、これはWeb上でのアンケート調査の結果であり、無作為抽出によるサンプリングではないため、統計的に平成27年度調査と令和元年度調査との間に有意な差異があることを示しているものではない点に留意する必要がある。
- 回答者の属性別に認知度を分析すると、「年代」「居住地」「来訪経験」に関する項目が認知度低下の要因となっていると考えられる。
- 回答者の年代をみると、基準値と比較して、善光寺、戸隠、松代の3つの地点すべてで、「10～40代」の認知度が低下している。特にこの年代のうち、「30～40代」は回答者全体の約4割を占めていることから、この年代における認知度の低下が、回答者全体における認知度低下に影響している。
- 回答者の居住地をみると、特に回答者に占める割合の大きい「関東」「北陸・中部」「近畿」に居住する回答者において認知度が低下している。特に戸隠や松代でその傾向が顕著にみられる。
- 回答者の来訪経験をみると、「来訪経験なし」とする回答者において認知度が低下している。平成27年度調査と比較すると、「来訪経験なし」とする回答者の割合は、年代では「40～50代」、居住地では「関東」で上昇しており、いずれも本調査の回答者に占める割合が高い層であるため、調査結果全体への影響が大きいと考えられる。
- 長野市に訪問したことのない観光客に対して、市内観光地を認知してもらえるような情報発信が必要といえる。

■ 目標値の算出方法：H27年度に実施した調査の結果、善光寺はすでに100%近い認知度を得ていることから、この認知度を維持していくことを目標とする。戸隠はR3年度に10ポイント（中間年度は5ポイント）、松代は30ポイント（中間年度は15ポイント）の認知度の増加を目標とする。

(2) 観光入込客数

(単位：千人)

		基準値 (平成 27 年度)	H29 年度	H30 年度	R1 年度	R2 年度	R3 年度
全 市	目標値	17,008(H27 御開帳) 10,018(平常年)	10,100	10,200	10,300	10,400	17,900
	実績値	-	11,008	10,727	10,382		
善光寺	目標値	12,288(H27 御開帳) 6,235(平常年)	6,300	6,360	6,423	6,485	12,903
	実績値	-	6,653	6,354	6,302		
戸 隠	目標値	1,613	1,629	1,645	1,661	1,678	1,694
	実績値	-	1,496	1,578	1,371		
松 代	目標値	776	784	792	800	808	815
	実績値	-	659	592	384		

評価

○全市の観光延入込客数

- 市全体の令和元年度の観光延入込客数をみると、10,382 千人となり目標を達成しているものの、平成 29 年度から減少傾向が続いている。
- しかしながら、台風 19 号の影響が想定される「10 月～12 月」、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響が想定される「3 月」を除くと、前年比 109.2%であり、必ずしも本市の観光延入込客数は減少傾向とは言えない。
- 10 月～12 月および 3 月の観光延入込客数の対前年比をみると、10 月は 53.6% (約 55 万人減)、11 月は 79.0% (約 24 万人減)、12 月は 81.8% (約 10 万人減)、3 月は 62.1% (約 15 万人減) の水準となっている。10 月～12 月および 3 月で、合計で約 100 万人の観光入込客数が減少している。

○観光地点別観光延入込客数

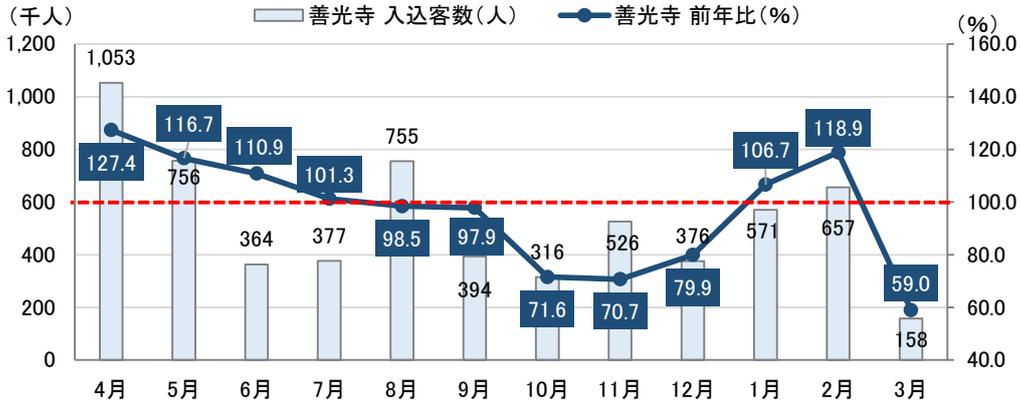
- いずれの観光地点においても平成 30 年度から観光延入込客数は減少し、目標を下回った。令和元年度の対前年比をみると、善光寺は 99.2% (約 5 万人減)、戸隠は 86.9% (約 20 万人)、松代は 64.9% (約 20 万人減) となっている。
- ただし、「10 月～12 月」、「3 月」の時期を除くと、善光寺は 111.2% (約 49 万人増)、戸隠は 102.1% (約 2 万人増) である。松代は 87.7% (約 4 万人減) となっている。
- 戸隠はハイシーズンである秋の行楽の時期 (10 月、11 月) に入込客数が大きく減少した影響は大きいですが、4 月、1 月、2 月に増加があり、年間を通じた平準化が進んでいるといえる。
- 松代では 10 月～12 月、3 月を除いても、5 月以外どの月においても減少しており、特に 4 月は前年比 77.2%、1 月は 70.6%、2 月は 70.5% となっている。年度の観光延入込客数が目標値から大きく乖離してきており、真田丸ブームが落ち着いた中で、次の誘客の起点を検討する必要がある。

■目標値の算出方法：平常年はH22年度からH26年度の平均値を使用。H29年度からR2年度は平常年の基準値をもとに毎年1%増、R3年度はH27年度から5%増を目標とする。

図表 1 全市 月別 観光地点別観光延入込客数 (令和元年度)



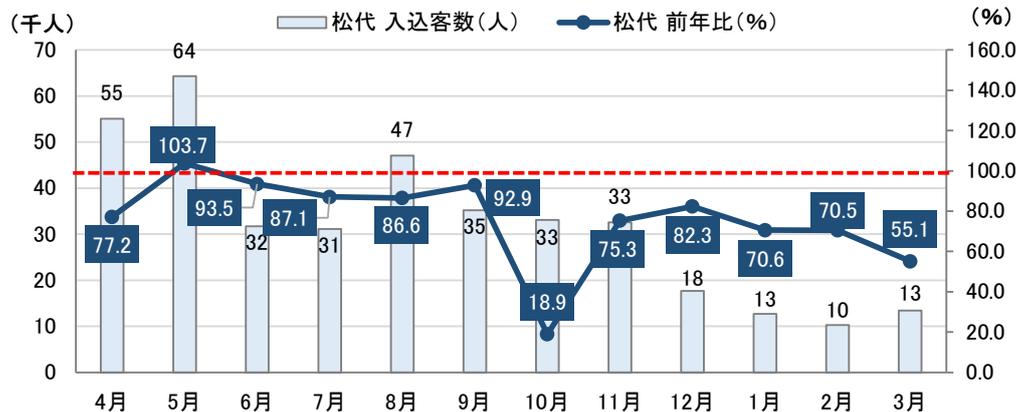
図表 2 善光寺 月別 観光地点別観光延入込客数 (令和元年度)



図表 3 戸隠 月別 観光地点別観光延入込客数 (令和元年度)



図表 4 松代 月別 観光地点別観光延入込客数 (令和元年度)



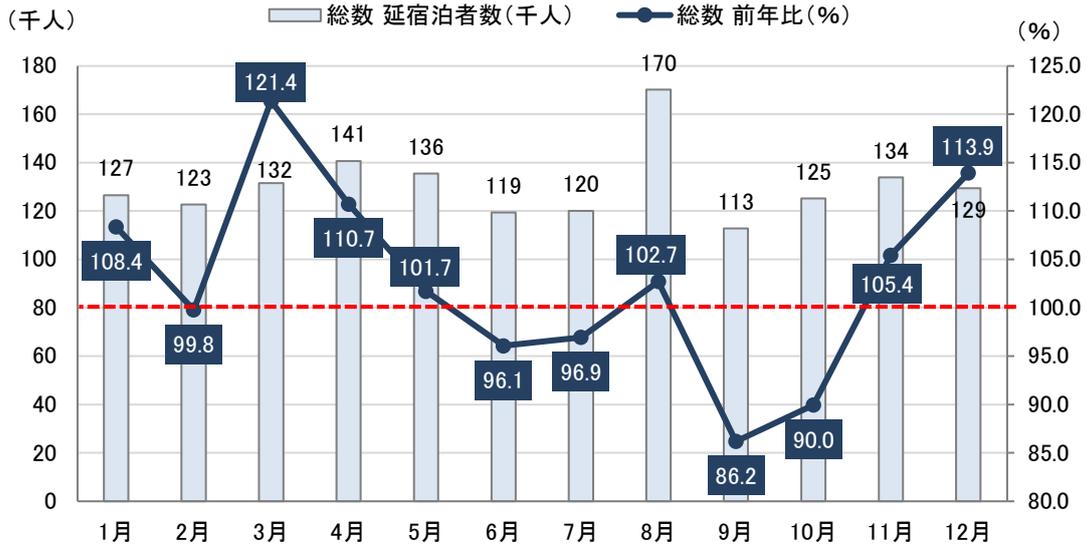
(3) 市内宿泊客数

		基準値 (H27年)	H29年	H30年	R1年	R2年	R3年
総宿泊客数 (千人)	目標値	1,603 (H27 御開帳) 1,400 (平常年)	1,428	1,456	1,484	1,512	1,763
	実績値	-	1,608	1,533	1,568		
外国人 宿泊客数 (人)	目標値	59,206	61,600	64,000	66,300	77,000	71,000
	実績値	-	113,177 [*86,382]	153,977 [*107,081]	165,493 [公表され次第更新]		
評価		<p>○総宿泊客数</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光庁「宿泊旅行統計調査」によると、令和元年（1月～12月）の総延宿泊客数は156万8千人であり、目標値を上回った。経年でみると、平成29年から平成30年は4.7%減少したが、平成30年から令和元年にかけて2.3%増加している。 なお、平成30年から令和元年の国全体の宿泊旅行者は、10.8%増加しており、本市はその水準を下回っている。 月別に平成30年から令和元年にかけての増減をみると、9月、10月は、前年同月比で9割程度の延宿泊者数になっているが、そのほかの月では概ね前年並みかそれ以上となっている。特に3月、4月、12月は平成30年の1.1倍以上となっている。9月、10月以外の時期においては順調に宿泊者数が増加したといえる。 今後しばらくは新型コロナウイルスの影響による渡航制限により、インバウンドの増加は見込めない状況である。GoToキャンペーン等の国による観光産業へのテコ入れをきっかけとしながら、国内旅行者の一層の獲得に向けた取組が求められる。 <p>○外国人宿泊客数</p> <ul style="list-style-type: none"> 外国人宿泊客数は、平成30年から令和元年にかけて約1.2万人の増加となっており、平成30年同様目標値の倍以上の値となっている。 ただし、伸び率では平成29年から平成30年が36.0%増であったの対して、平成30年から令和元年では7.5%増となっており、鈍化の傾向が見られた。 国全体の外国人宿泊客数の伸び率は、平成29年度から平成30年度が18.3%増、平成30年から令和元年が22.7%増となっており、全国的にはインバウンド誘致が加速していた状況であり、全国的な伸び率と比較して、本市の伸び率は低くなっている。 					

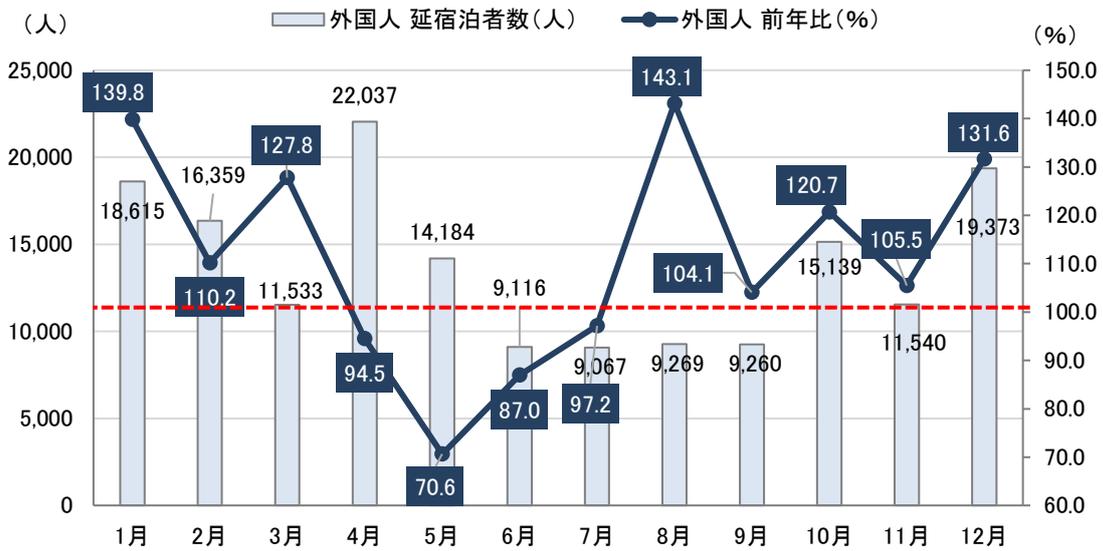
※…この数値は長野県「外国人延宿泊者数調査」による実績値である。

- 目標値の算出方法：
- (1) 総宿泊客数：観光庁「宿泊旅行統計調査」のデータを活用し、平常年はH23年からH26年の平均値を使用。H29年からR2年は平常年の基準値をもとに毎年2%増、R3年はH27年から10%増を目標とする。
 - (2) 外国人宿泊客数：H27年を基準値とし、R2年のみ基準値から30%増、それ以外は基準値から毎年4%増を目標とする。
 - (3) いずれの数値も暦年にて算出

図表 5 月別 延宿泊者数 (令和元年)



図表 6 月別 外国人延宿泊者数 (令和元年)



(4) コンベンション等参加者数

(単位：人)

		基準値 (H27 年度)	H29 年度	H30 年度	R1 年度	R2 年度	R3 年度
参加者数	目標値	115,537	-	-	-	-	120,000
	実績値	-	106,513	113,702	108,061		
評価		<ul style="list-style-type: none"> 令和元年度のコンベンション等参加者数は 108,061 人であり、地方都市では高い水準を維持している。目標達成に向け、誘致するコンベンション数を増やす、大型と併せ中小規模のコンベンションを誘致するなどの取組みを継続的に実施していくことが必要である。 					

■目標値の算出方法：R3 年度において、基準値(H27 年度実績)の 5%増を目標とする。

(5) 一人あたり観光消費額

(単位：円)

		基準値 (H27 年度)	H29 年度	H30 年度	R1 年度	R2 年度	R3 年度
全 体	目標値	13,017	13,300	13,500	13,800	14,100	14,300
	実績値	-	13,866	10,415	11,693		
宿泊客	目標値	21,266	21,700	22,100	22,500	23,000	23,400
	実績値	-	22,307	18,536	19,997		
日帰り客	目標値	7,658	7,800	8,000	8,100	8,300	8,400
	実績値	-	6,812	6,207	6,483		
評価		<ul style="list-style-type: none"> 市内来訪者に対する調査結果をもとに算出した、一人あたり観光消費額（宿泊客および日帰り客を含めた全体）は、令和元年度は 1 人あたり 11,693 円となっており、平成 30 年度から 1,278 円増加したものの、依然として平成 27 年度の基準値および目標値を下回っている状況である。 宿泊客・日帰り客別にみると、ともに基準値を下回っているものの、宿泊客で 19,997 円、日帰り客で 6,483 円となり、平成 30 年度から増加している。 内訳をみると、宿泊費やお土産代、また長野市において支払った電車代・高速バス代において一人あたりの消費額が増加している。 目標達成のためには、宿泊客で約 3,500 円、日帰り客で約 2,000 円、消費額を増やすことが必要となる。引き続き、一人あたりの消費額の大きい宿泊者の比率を高めるとともに、地域内の観光資源の付加価値を高めることが求められる。 					

■目標値の算出方法：来訪者調査の結果(H27 年度実施)を基準値とし、毎年 2%の増 (R3 年度において 10%の増) を目標とする。

(6) 満足度（とても満足の割合）、リピート率

(単位：%)

満足度 (とても満足の割合)		基準値 (H27年度)	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度	R3年度
全 市	目標値	46.6	-	-	-	-	57.0
	実績値	-	39.7	40.9	44.0		
善光寺	目標値	43.1	-	-	-	-	53.0
	実績値	-	37.8	43.2	45.5		
戸 隠	目標値	54.3	-	-	-	-	65.0
	実績値	-	49.2	48.5	55.8		
松 代	目標値	43.1	-	-	-	-	53.0
	実績値	-	36.6	31.6	31.4		
リピート率		基準値	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度	R3年度
	目標値	56.0	-	-	-	-	66.0
	実績値	-	65.7	56.4	60.9		
評価		<p>○満足度</p> <ul style="list-style-type: none"> 市内来訪者への調査結果をもとに算出した、観光に対する満足度（アンケート調査で「とても満足」と回答した割合）をみると、令和元年度は44.0%と基準値を下回ったままであるが、平成29年度以降上昇傾向にある。 観光地点別の満足度をみると、善光寺及び戸隠はいずれも令和元年度には基準値を上回っているが、それぞれ目標値を達成するためには、引き続き魅力向上の取組みに力を入れることが求められる。また、松代では満足度が減少を続けており、目標達成のためには20%以上の上昇が必要となっている。満足度向上のためのでこ入れが求められる。 令和元年度の満足度を属性別にみると、「男性」は39.6%、また「60代以上」で37.7%となっている。回答者に占める割合の大きいこれらの属性の満足度が低いことが、全体の満足度を引き下げる要因となっていることが考えられる。特に松代エリアでこれらの属性の回答者の割合が高く、中高年の男性に対して満足度向上の目指す取組みが求められる。 <p>○リピート率</p> <ul style="list-style-type: none"> 市内来訪者への調査結果をもとに算出したリピート率については、年度ごとに増減があるものの、令和元年度で60.9%となっており、平成30年度から4.5ポイント増加している。目標値の66.0%の達成に向けて、引き続き満足度向上や四季折々の楽しみ方の開発など、複数回来訪するための理由づくりが必要となる。 令和元年度のリピーター率を居住地別にみると、来訪者の主な居住地である「関東」で61.6%、「北陸・中部」で58.6%、「近畿」で62.7%となっている。特にリピーターとして訪れやすいこれらの地域から繰り返し訪れたいと思われるような取組みが全体のリピーター率の向上に求められる。 					

■ 目標値の算出方法：(1) 満足度：来訪者調査(H27年度実施)の結果を基準値とし、R3年度において10%増を目標とする。なお、満足度の質問項目は、「1. とても満足」「2. まあ満足」「3. やや不満」「4. とても不満」の4項目で、項目1の回答割合を満足度として用いている。

(2) リピート率：市外在住者で3回以上来訪経験を持つ者の割合について10%増を目標とする。

(7) 経済波及額

(単位：億円)

		基準値	H29 年度	H30 年度	R1 年度	R2 年度	R3 年度
	目標値	1,256 (H27 御開帳) 744 (平常年)	759	774	789	804	1,381
	実績値	-	918	700	733		
評価		<ul style="list-style-type: none"> 令和元年度の経済波及効果は733億円となり、依然として基準値および目標値を下回っているものの、平成30年度から33億円増加した。 算出の根拠となる初期消費額（観光客が直接市内で消費した金額）は、平成30年度の627.5億円から、27.1億円増加し、654.6億円となっている。内訳をみると、日帰り客で2.5億円、宿泊客で24.6億円の増加である。日帰り客はお土産代、飲食代や電車代、高速バス代が、宿泊客はお土産代、宿泊費が伸びている。 初期消費額は観光入込客数と一人当たりの観光消費額によって算出される。入込客数は減少傾向であるものの、一人当たりの観光消費額が日帰り客（市外宿泊者を含む）・市内宿泊客双方において上昇していることが初期需要ひいては経済波及効果の増加に寄与している。 令和元年度は、平成30年度以上に自然災害や感染症等の外部要因により大きく影響を受ける年となったが、一人当たり消費額の増加により着実に経済波及効果は大きくなっている。今後は「新しい生活様式」に対応する観光のあり方に転換が求められる中で、観光入込客数自体が従前どおりの水準が期待できないことが予想される。地域経済における観光産業の波及効果を大きくするためには、今後一層一人当たりの観光消費額を高めることが求められる。 					

- 目標値の算出方法：来訪者調査(H27年度実施)により、市内での観光消費額を算出。H27年度の観光入込客数と、H22年度からH26年度の観光入込客数の平均値をそれぞれ用いて、H23長野県版産業連関表をもとに算出。H29年度からR2年度は平常年の基準値をもとに毎年2%増、R3年度はH27年度から10%増を目標とする。